

令和4年度 自己点検評価・学校関係者評価結果公表シート

学校法人 下福島学園 下福島幼稚園

1. 本園の教育目標

快適で安心・安全な教育環境を保障し、幼児の心身の育ちを大切に考えながら、遊びを中心とした教育内容の充実と実践を目指している。また、幼児が幼稚園という集団生活の場で友達と十分に遊ぶことにより、自他の存在に気付き、道徳性・社会性・創造力・助け合いの心と自立する心を身につけて、生きる喜びを味わい、生きぬく力を培っていけるように配慮する。日常保育の中では基本的に、よくみる・よくきく・よく考える・よく手足を動かすことを徹底し、明るくよく遊ぶ子・興味を持ち集中出来る子・絵本の大好きな子・優しく助け合う子の育成をすることを教育目標とする。

2. 令和4年度 重点的に取り組む目標と計画

令和4年度の研究テーマを「心身健康で豊かな発達・成長をめざして」とする。令和4年度も依然として令和元年度学年末からの新型コロナウイルス感染症が終息せず、巷間の感染者数増加を予測しつつも、当園では保護者へ慎重策の理解を求め、教職員には予防対策と消毒作業の継続を促すことで本年度もクラスター発生はなく、学級閉鎖と休園をしないことを目指す。新型コロナウイルス感染症だけでなく、他のインフルエンザや幼児特有の感染症の流行も防止するように努める。教育活動は、昨年度より一歩進める形で、様子を見ながら緩和策を取りながら、諸行事も可能な限り実施する方向で計画し、子ども達の健やかな発達と成長を促すカリキュラム作成の下、確実に実行することによって二学期後半から子ども達の園生活に変化をもたらすことを目標に指導計画を立案する。園児だけで公共交通機関を利用した園外保育の再開を目指す。総てをコロナ前に戻すことに捉われず、慎重策をとりつつ、あらたな取り組みも視野にいれ、教職員と保護者と協議を重ねながら入念に準備をして確実に積み重ねていくことで、次年度へのステップにしていくことを大きな目標とする。

3. 評価項目の達成及び取組状況

評価項目	取組状況
新型コロナウイルス感染症リスク回避と教育内容の充実	新型コロナウイルス感染症も3年目となるが、ウイルスそのものが変異を繰り返し、いまだ特効薬完成に至らず、感染者数も多い。しかし、行政においては経済活動の活発化も考える時期にきており、第5類への移行報道も出てきた。但し、終息していないことには変わりなく、当園でも文科省及び大阪府等からの決定的な指導連絡がないことを教職員や保護者に伝達し、依然として慎重策をとって感染予防とクラスター発生前の措置を直ちにとって教育の停滞を招かないことを宣言したことが幸いして大事の前の対策が可能になった。リスク回避が出来た。このことは大変意味のあることで、3年間取り組んできた衛生管理の徹底が功を奏している為、継続をしていくことの重要性を教職員も感じて、現実に保育終了後の清掃と消毒作業の負担はあるものの、園児・保護者・教職員が健康に園活動の展開が可能になっていることが実感できた。そして、現状を維持しながら教育内容を如何に向上させるかについての前向きな動きが教職員に見られた。その際たるものが、地域との交流活動の再開と公共交通機関利用による園外保育を実施したことである。もちろん実施時期や訪問機関等の利用者や混雑状況把握と関係機関との協議を重ね、リスク軽減を第一にして、教育効果が上がるように留意して実行出来たのは、大いに評価出来る事である。園児・保護者・教職員の満足度もアップした。

<p>創立 70 周年を迎え、記念事業を踏まえた次の教育と、再度新制度移行について協議検討する。</p>	<p>平成27年度から新制度が施行されて、早や8年を経過するが、新制度への移行園も増加はしているものの、国・府・市では、何かを検証して本制度を根本的に考えるという動きはない。その様な中で少子高齢化や子どもの権利や人権重視ということで、「子ども家庭庁」の発足も本格化させるという動きが出ている。しかし、やはりこの「子ども家庭庁」なるものにも現段階では、本当に「こどもを真ん中」ということに注力されているかが明確でない。</p> <p>昨年度も明記したが、やはり教育基本法及び学校教育法で位置づけられている私立幼稚園の、「私学と雖も公教育の一翼を担っている。」ことが大切にされない限り、また、幼稚園教育を推進する純粋な幼稚園として成立しているという理念を変更することは難しく、次年度も当園の新制度への移行はないと役員会でも承知された。経営的なことからすれば、新制度園は交付金、私学助成園は補助金で、園にもらえる額も大きな差がある。経営上は大きな魅力だが、現在当学園の経営状況は、借入金もなく、人材不足の中でも教職員配置数が多く人件費のパーセンテージは高いとはいえ、経営を圧迫するには至ってない。人材不足の折でも当園では何とか手厚い人員配置が出来て、園児一人ひとりに対しての配慮も可能になっている。本年度は創立 70 周年を迎え、区切りの式典を園児・保護者・教職員でどの様に挙行するかを協議検討して準備し、無事に 11 月 25 日の記念式典とお祝いの会を開催出来た。記念誌もこれまでの 50 年・60 年と同じように刊行し、関係者へも配布が出来た。本記念式典に向けての園児と教職員の取り組みは、保護者や関係者からも大きく評価され、日頃の取り組みとこれまでの実践に間違いがなく、創立以来の教育理念を曲げることなく積み重ねてきた結果であるということが実証出来た。教職員には大いなる自信となったようである。これらの経験を踏まえて今後当園がどうあるべき方向を目指すのかも、自ずと見えてきたように感じる。よって、もう暫く新制度や子ども家庭庁なるものの動向を慎重に見て、判断を誤ることのない様に取り組むと協議された。</p>
--	--

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

<p>本年度は創立 70 年という節目の年でもあり、教職員も一段と教育活動の見直しと推進に力を注ぎ、自己点検評価も原点に戻って形骸化することなく、一人ひとりの自己点検評価が出来ていた。</p> <p>経験豊富な教職員と久しぶりに新任教員が多くなった年度ではあったが、縦割り活動をすることで教職員も縦に分かれてのチーム保育をすることも多く、創立 50 年・60 年の記念式典や祝賀会の経験者もあり、これ迄 2 回の経験はあるものの新型コロナウイルス感染症拡大防止策を取りながらの大きな行事である創立 70 周年記念式典と祝賀会を如何にすべての人々と喜びを共有するかを、率直に意見を出し合いながら大筋を決定し、決定事項の実行に向けての取り組みをチーム一丸となって推し進め、当日を迎えた。努力の結果、とても素晴らしい会になった。発表までチームでの取り組みを進める中で互いに学び合うことも多く、教育力がアップしたと評価出来る。例年とは違う特別行事の開催を目指してということが、当面の目標でもあったが、新学期から一年間をしっかりと見据えた計画を立案していた為、11 月 25 日に大きな結果を生むことに繋がったが、以後もその事の経験からの自信が同え、園児と教職員共に、大飛躍を遂げて年度末を迎えることが出来た。当園の教職員は、常に謙虚に自己を見つめ、厳しめの評価をして次年度に対して更なる高みを目指して努力することが、代々言い継がれている。潜在している能力が評価に値するものを持っていると思われるが、現状に甘んじることなく互いの切磋琢磨を忘れないところを大いに評価したい。行事毎に保護者からも感謝の声が聞かれ、定期的で開催される評価会でも批判よりよりよく評価する声が多く、本年度も高評価であった。</p>

5. 今後（令和5年度）取り組むべき課題

課 題	具 体 的 な 取 り 組 み 方 法
<p>新型コロナウイルス感染症が終息せずとも、第5類に移行される見通しも出てきたことから、これ迄のコロナ感染症下における経験を活かして次年度の教育展開をどの様にしていくのか？単なる従前に戻すことをせず新たな教育展開を実践していくことをしっかり考えて実行に移すことが大きな課題である。</p> <p>次年度の取り組むべき課題を本年と大きく異なる事をせず幼稚園における「幼児期の豊かな育ちをめざして」とする。」</p>	<p>何処までも新型コロナウイルス感染症対策とその中で確かな教育効果を目指しての取り組みということが常態化してきた年度であり、終息には至っていないが、感染症とうまく付き合いながら目指すところを着実に可視化していくことが求められる。そのことは教職員も自覚しているだけに、本年度は創立70年、そして、その年の教育実践の経験を踏まえて、次の71年目をスタートさせるかも、しっかり理解した上での一年間の自己点検をした。</p> <p>令和時代に入って、これ迄3年間も新型コロナウイルス感染症下における取り組みをしてきただけに、その3年間で何が良くて何を変えていくべきか？園児や保護者の変化と自分達の変化をどの様に刷り合わしながら、継承すべき教育内容と新挑戦をする教育展開は何なのかを精査して次をスタートさせることが重要と考える。</p> <p>そこで教職員からは、これ迄も日々の保育の中で、取り分け園児の体力と心の成長との関係を比較すると、昭和や平成の子ども達と令和になってからの子ども達の身体状況の変化と体力低下が顕著になっていることことを実感するという意見が上がっていた。また、保護者に対しての見方も、令和以前とは異なる子育て観や子どもへの関り方（育て方）になってきているのではないかと、そして、極論を言えば家庭育児が低下しており、保護者と幼稚園とが連携して子育てをするという形態でなく、幼稚園への依存度が高くなって、一方的な保護者から園への要望が多くなっているのが目立ってきたという意見が聞かれた。確かに園児の身体能力の低下や保護者の変化は否めない。園児と保護者についてのこの様な見解は、特に令和になって目立つ傾向であると感じてきたことで、その対策にも少しずつ準備をしてきたところである。</p> <p>コロナ感染症での引きこもり生活が、園児と保護者に変化をもたらしていると決定付けられないが、実態に対しては打つべき対策を考え、教職員にはこれ迄園内研修で園児の心身の発達と成長について学びをして、本年度も体力強化の為に体育指導者の講習も行い、保育に身体能力を高める遊びの実践をしてきた。しかし、教職員だけでは完結出来ないこともあり、ここ数年温めてきた対応策として次年度から段階引き上げた園児の体力強化、体幹を鍛える為に、専門知識と実行力を兼ね備えた専門指導講師の配置をすることを決定した。そして、体力だけでなく、今の園児達が将来の社会の担い手となるには、国内外での活躍が期待できる大人に育つ仕込みを園生活の中でしていく必要性を強く感じることから、英語教育も視野に入れて、どういう形態での実施が有効かを考えてきた。新年度からの導入には慎重に精査してきたが、一定の方向性が見出せた為、教職員にも協力依頼をし、保護者にも折に触れてこれまでの当園における教育実践と共に、体育指導と英語指導の強化をすることの経緯等を含めた教育観を丁寧に説明し、最終的に同意が得られた。保護者からの期待する声が多く、後は次年度好スタートを切れることを目指したい。</p>

6. 学校関係者の評価

本年度の学校関係者による会議は、昨年度より状況判断をしつつ開催回数を重ねた。本年度は、創立70周年事業の実施と成功ということが大前提であった為、それを先ず完遂することを目標としながら、教育展開をしていくことにした。しかし、その行事の中心は園児であり、大人が行事の為に園児を不在にさせない。園児の心身の発達と成長無くしては成立しないことを確認する為、日々の教育と保育の在り方を常に振り返り、協議する場を設定した。また、その特別行事が、最終的に園児の発達と成長に有効であったかについて、教職員と学校評価関係者に問う場も設定した。コロナ禍であっても、感染リスクを軽減しながら特別行事を成し遂げ、園児の最大限の能力を引き出し、教職員の互いの教育力を向上させ、三方良しという最高の記念事業が達成出来た。しかも、その経験が3学期の良好な教育内容の充実に繋がったという評価が得られた。そして、創立71年目の次年度に体育指導と英語指導が加わることで新たな質の高い教育を期待する意見も寄せられた。

7. 財務状況

令和4年度の会計証票伝票は、正確に整理されており、年2回の公認会計士監査では指摘事項なしと評価された。本年度は特別行事会計と、人材不足ながらも豊富な人材を配置することから人件費が高んだが、学園経営に大きく影響することはないと役員会でも一定の評価がなされた。大阪府提出書類と大阪市の幼児教育無償化関係書類ももれなく提出完了出来ており、どちらからも特別指導がなく、問題なしの評価を受けた。学園役員・学校関係者及び保護者からは異論なく好評であった。今後更なる確かな情報伝達を目指したい。財務状況全般については、本年度も借入金なしで良好な経営状況であった。今後も教育と経営のバランスのとれた安定的な経営を目標に努力を続けることに専心する。